

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

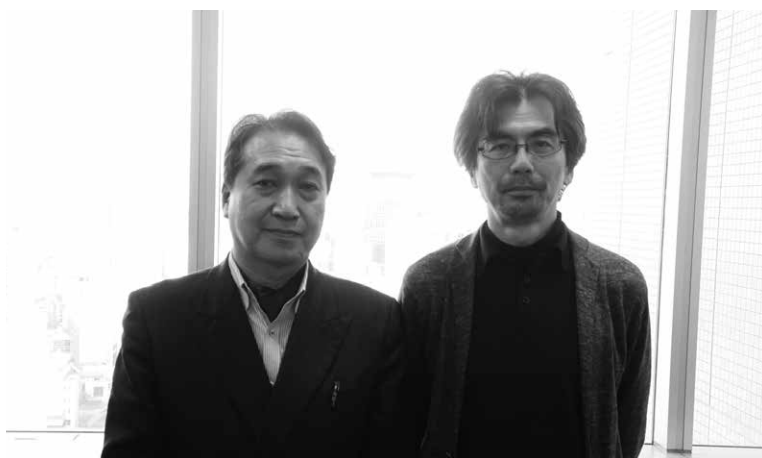
対談 文化情報学とは何か、何であるべきか?

著者	大嶋 良明, 森村 修
出版者	法政大学国際文化学部
雑誌名	異文化
巻	18
ページ	44-86
発行年	2017-04-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/13164

対 談

——文化情報学とは何か、何であるべきか？

大嶋 良明先生 × 森村 修先生



大嶋 先生 × 森村 先生

森 村 本日はお忙しいところ、お時間をとっていただきまして、どうもありがとうございます。

した。

今回の趣旨としては「異文化」の特集で、大きく一つは大学院を少しクローズアップさせようと思つて、もう一つ、座談会として昨日行つたのが、大学院執行部の専攻主任と副専攻主任の松本先生、佐々木先生両名と学部執行部の棚本先生と興石主任の四人で、学部と大学院の連携強化を目的にして、どうやったらお互いがすり寄つて有効な場、もしくは教育の継続ということを学部、大学院教育を考えるテーマで、忌憚のないご意見とご本人たちの思いを語っていただきました。

研究科に対して学部がどう思っているのか、学部の先生に対して研究科の先生がもう少し何か積極的にアプローチすることはないのか。

大嶋先生も研究科長をおつとめされた方として、学部教員に研究科の科目をもつていただくときに、正直いうとキャンセルされたりとか、研究科をおりて学部だけにしたいという先生たちも随分いらした。大学全体として、学部が主になりがちで、どうも研究科がおまけ、もしくはみそつかす扱いされてきたということはよくないだろう。まして三分の



大嶋 先生

一ぐらいの教員、もしくは半分弱の教員が研究科にかかわっている以上は、もう少し学部の方にも研究科のあり方、もしくは研究科で何をやっているかという現実をお伝える。そのときに、私のほうで判断でさせていただいて、まず執行部の先生方がどういう距離感でお互いをみているのかということを確認するという企画で座談会を設けたんです。

その際に、榎木先生から、大学院をもっと見える化、見せる化してもらいたいという要望がありました。つまり、私の不勉強だけれどもとおっしゃいながら、何をどういう形で、どんな院生がどういう活躍をしているのかが届いていないということです。どうしたら大学院の中の研究が学部情報提供できるかということをご意見いただいたり、今度は逆に、学部からどうやって大学院を推薦させるかというか、大学院に進学してみたら、続けて勉強してみたらという形でプロモーションというか、後押しをするようなきつかけとしても大学院の内情をよく知りたいということもあつて、全く担当されていない先生から見ると、見えていないのがもったいないという部分もあつて、そんな意見をお伺いした。

今度は研究科から一つ、例えば修士論文を上げて、学部生に対してはなかなかアプローチがしにくいというか、これも佐々木先生のご発言の中にあつたんですけれども、大学院の修士論文がみせられるレベルに到達していないのかもしれないという大学院教育の問題がある。その中で、一つの成果公表物としての修士論文のテーマが固定されていたりとかという問題もあつて、私の言葉でいえば、外に向かって自慢して、ほら、こんな研究もできるんだから、学部生も少し興味があつたら一緒に大学院のゼミでやらないかでも何でも、水を向けるきつかけになり切れているのかどうかなどという意見も大学院側からありました。

そういった意見をいろいろ聞きながら、興石先生から、読む、書くをもう少し徹底しないといかんと。今度は学部のゼミの中の問題として、卒論を書かせる、もしくは卒論を書いていないとかという問題もある。卒論、もしくはそれに近いものをもっていくようにすることが大学院の入試基準の中にあつたりする。卒論をそもそも書いていないとか、映画をつくつただけだと、そのままストレートには大学院の入試に応募するのが難しい。——その中で研究を続けていく場所としての大学院というのを議論していく上で、お互いをもう少し情報提供し合いながらつなげていくということを、先生方の意見を聞きながら確認したという座談会を先週設けたん

です。

ここから仕切り直しをしてお話をしますけれども、先ほど個人的にちよつとお話をしたときに、川村湊先生が今年度で退職される。その際に、私たちの出た法政大学の哲学科でもそうですが、よくあったのは「最終講義」という制度があつて。このところ、おやめになる先生が学部でも毎年いらつしやるけれども、退職記念の最終講義をやっていた先生があまりいない。今回も川村先生は固辞されていて、大学院の授業をまだもつから、本当の意味での退職ではないんだという型どおりのご弁明なんだけれども。この学部をつくった段階で、第一教養部があつた時代の学部の準備委員会が準備委員長として文部科学省に折衝したり、理事や総長と、いろんな議論をされてきて、九九年四月に大嶋先生たちを迎えて学部をつくったときの功労者であり、初代学部長でもある。

それも含めて、川村先生が退職されるのに、置き手紙の一つでも置いていたただきたかつたなという思いが個人的にあり、ご存じのとおり、私は柄谷行人の学生であり弟子であつたから。彼は初代の弟子であつたということも含めると、やはり弟子として一緒にやってきた、この学部をつくってくる最初にかかわってきた者としても、彼自身がこの学部を卒業していく際に、何かしらの贈る言葉をもらいたいという意味もあつて、もう一つの企画で、あした川村先生の単独インタビューをして、川村湊という人間がどうやって国際文化学部をつくってきたのかというのを、彼自身の長い歴史とともに、法政、国際文化、もしくは研究科というストーリーの中で一つの記事をつくらうかなと思っています。

今回、もう一つ大嶋先生にお願いしようと思つたのは、二つにかかわっていく議論の中で、学部と大学院を踏まえて情報学をずつとやってこられているということ。新設の学部をつくった当時から情報学、もしくは「文化情報学」に対してご理解をいただいているという意味で二つのテーマ、大学院と学部との関係強化にもかかわるし、学部をつくって大学院まで教育をしてきたということも含めて、それを情報学という立場と研究分野の中で続けてこられたということで、今、四コース制になっていますけれども、最初はべたつとした一枚岩の中でやってきたこの学部がいろんな転変の中で四コース制になった中で、今、少し「情報文化」というかたちになつてしまっていますが、本来は「文化情報学」を目指す「国際社会人」養成という学部の理念と方針だったことをあらためて考え直したい。そこで初発に立ち返ったときに、情報学って何だったんだらう、もしくは「文化情報学」って途上なのか、このままついでいていくのか。科目としては「国際文化情報学入門」があつたり、「国際文化情報学の展開」があつたりしながら、学生たちに「文

化情報学」の理念や内容がちゃんとした形で届いているのか。もしくは教員たちの中で「文化情報学」をそもそも知らない、もしくは聞いたことがないという先生たちもだんだんふえつつあるような感じもする。その点に対して私も二つの記事を書く中で、情報学、「文化情報学」、「情報文化」でも構わないし、もしくはメディアということを入れるなら「表象文化」でも構わないし、本来という言い方がいいのか悪いのかわからないんですけども、もう少し別の角度で国際文化学部、もしくは国際文化研究科をみていったときに、そもそもどんな風景が描けるのか、描いたほうがよかったのかも含めて、ちよつとした反省と回顧及び今後に向かつていく情報学の必要性和重要性みたいなことを語っていただきたいのです。大嶋先生が来てから十六年たつ……

大嶋　もうそんなになりますか。

森村　九九年なので、丸十六年たってしまうわけですから、生まれた子ですら高校生になるほどの時間がたっているわけで、こうした場合でもう一度川村元学部長が卒業されるという機に、初心という言い方がいいのか悪いのかわかりませんが、もう一回少し見直す中で、これは時代とともになくなっても仕方がないんだということ、これは時代関係なく、本来はもっとやるべきだったこともあったかもしれないし、それと同時に、どうもう少し変えられていくべきだったのか、変わっていったほうがよかったのか、これから変わりつつあるのか、それとも変わらないものもあつていいのかということなどを忌憚なきご意見とご発言をいただきたいのです。というのも『異文化』という雑誌を一つの学部内広報誌、もしくは外に向けての一つの広報雑誌に切りかえていきたいという私の年来の希望と理想があるなかで、それを読んだ、もしくは高校の出張講義される先生方にも持参していただいて、高校生に向けて、別にSAと国際貢献、国際関係がこの学部じゃなくて、メディアとか情報とか、さまざまそういうものを文化として学んでいく場所であるんだよということを、高校生や学部生になった子たちにも向けて書いていきたいと思っています。そうした観点からの先生のご意見で、そういった読者層、読み手に対しても届くような言葉で少しご説明いただけたらなと思っています。

大嶋　では、何からお話しすればいいですかね。

森村　順番からすると、一番簡単に自己紹介的な話もあると思うので、先生がIBM時代から法政に呼ばれて移ってこられて、一期生からずっとゼミをやつて、随分異色のゼミ生を育てつつという歴史も踏まえて回顧のお話をして、今、教員の中にも、先生がどうい

大嶋

来歴でここにおられるのかということもご存じない方もたくさんいらっしゃる時代に入ったので、話せる範囲で個人のここまで来られた経緯、学部に入るまでの経緯を少しお話の上で続けていきたいと思うんですが、よろしいでしょうか。では、お願いいたします。学部創設は九九年四月です。そのときに着任した一人ということになりますけれども、もともとはIBMという会社で研究開発に携わって十五年ほど仕事をしてきました。その間に学位留学を五年半ほどやって、アメリカで過ごして、その後また日本に戻ってきて、研究に戻ったという感じなんです。

専門は、コンピュータの応用分野としてパターン認識とか信号処理とか、そのようなものをやってきておりまして、適用分野としてはオーディオとか音声とか、そういうマルチメディア処理の中で音に関係する部分をどのように扱うかということで、コンピュータの応用分野としては、対話システムとか音声認識とか、そのようなものをやってきていたんです。

機会がありまして、紹介してくれる人がいたものですから、法政でデジタルメディア関係を教えられる人が要るのかなというところで応募したと。それがこちらに来るきっかけだったんですけれども、何回か行き来してお話するうちに、川村先生がおられて、当時の担当理事の川上理事のお二人が文化情報学という学問を立ち上げるんだと非常に熱っぽくおっしゃっておられて、それには情報関係のディシプリンが絶対必要になるということで、ある種、僕も非常に大きな期待というか、立ち上げのときの熱い気持ちを共有できたというのが幸運だったなと思います。

今たまたまSAという言葉が出まして、SAは確かに非常に大事な学部の教育事業としての目玉というのか、大きな特徴だったわけですけども、今でも覚えているのは、最初に大学がつくったSAの説明パンフレットのキャッチフレーズは「地球が研究室」というものだったんです。これはすごいと僕は思っ、自分は留学したんですけれども、大学院を一回出て、企業に就職して、仕事を始めて四年ぐらいたったもう一回、今度は留学したということだったんですが、学部の学生に世界中に散らばってもらって勉強させる。そこで何を吸収して帰ってくるかということが非常におもしろいなと思って、そういう立ち上げのときの熱気とかうねりをずっと共有できたというのとはとても幸せですね。



森村 先生

森村

私は、準備のほうでは、S Aを導入するかしないか第一教養部の中であつた際、当時の先生方で当然S A賛成派と反対派みたいなのがあつたりして、私はどちらかというところと反対派にいた。私は海外の留学経験がなかったので、具体的にさせることがないのに行かせてどうするんだろうみたいなことを思っていたことがあつた。教養部の教員だったもんですから、学部生のゼミとか卒論指導は関係なかったもので、たまたま私、その当時はもう大学院を終わつて、博士論文を書いて終わつた直後ぐらいだった。だから、国内の制度が変わつて、課程博士がとりやすくなつたという制度切りかえのちょうど時期になつていて、私の指導教授から博士を出しなさいといわれたので、法政で教えながら自分で論文を書かなきゃいけないという状況で大学の教員になつていた。

それをやつと書き上げて、留学という話が出たときに、私たち教員として教養部にいながら、卒業論文から修士論文から書いてきて、博士論文まで相当かかったんですけれども、今度学部をつくつたらゼミをもちましよう、卒論は必修ですよということをする中で、二年の後期、もしくはいつ行くかということも当時いろいろ議論があつて、三カ月プランとか半年プランとか一年プランとかいろいろあつたんですが、これで全うに卒論を書く時間がとれるのかしらとか、当時ののはやりの言葉で文理融合だったりとか、まだそういう言葉があつた時代で……

大嶋

今でもあります。

森村

基本的に文系学部で情報学を学ばせて、理系の分は自然分野の物理、化学、数学とかという先生が教養部の中にも、当然のことながら、理工学部、理学部、工学部ではない。私大文系という感じの色が強い法政の中で、情報学を最初からきちんとやり直すとかなかなか考えつかない、私たちが大学時代のときは、法政にも「情報処理演習」というのがあつたんですけど、これはくじ引きだったので、人気があるもんだから、私なんかは最初から授業を受けられない。昔はBASICだったりとか、C言語だとか、コンピュータがちよこつと入ると、でかいコンピュータ室か何かでちよこちよやるというのが私たちにとつての情報処理という現実だった。

当然のことながら、ずっと後の九九年になるための九七年ぐらいから一教の中で準備始まつていて、そうした中でS Aプログラムをどうするかというときに、今いったように、学部の授業が成り立たないうちに、学部を離れて海外に半年間送り込んで何をさせてくるんだらうという問題と、では戻ってきた子たちに、ちゃんとそれを踏まえて卒論研究させることができるのかなということが自分の中にイメージがつきにくかつたというのもあつて、私はどうもこのプランはまずいんじゃないかと思つていた。

そこで、語学の先生が主体になって、当時、熊田先生が座長だったときもあつたりして、これはやることに決まるから、今度は国を選ばなきゃいけないという話になった。国を選ぶんだつたら、私も西洋哲学をやっていたもんだから、西洋言語じゃないほうがいいんじゃないかと単純に思っていたんです。中国、韓国は多分入るだろうけれども、東南アジアやアフリカ地域やイスラム圏はどうなるんだろなんて話になってきて、行きたい国とか行かせたい国というのをとにかく冗談でもいいから出してみたいなと思いました。その中で東南アジアとかアフリカとかイスラム圏はどうなのなんて話をしたんだけど、最終段階で当然のことながらセキュリティだとか国の政情とかということがあつてだんだん削除されたりとか、今まで法政が語学で抱えている英、独、仏、中、西、露、韓の部分の基本にしてという話になったので、ではイタリアは？　だめです、イタリア語がないからとか、そんな中で、世界って主要八カ国なのか、そういうイメージがあつたもんですから、今、先生の「地球が研究室」というパンフレットを当時見たはずなのに、すっかり忘れて、そうかと。

その一方で、文化情報学は、川村先生がとにかく情報という学問がこれからの時代に絶対必要になるし、小中高の代からゲームみたいなものも含めて広まるはずだから、大学がこれに乗りおくれてはいけないということをたしか教授会がどこかでいったことがあつて、その中で、造語なんだけど、文化情報学をつくったという話をして、とにかくこれをキャッチフレーズにして、S Aと国際社会人という、先ほどいったように、全て世界でグローバルに展開できる社会人をつくっていくんだと。そういうことで、昔のことを思い出すと、内部にいた人間と、大嶋先生のように外からいらした先生との最初のうちの温度差みたいなのがあつた部分かなと思つて……。ちよつと情報学から離れちゃったので……

大嶋　いや、いいですよ。実は僕の頭の中ではつながっているんです。最初の何年かというか、完成を迎えるまでの四年ぐらいの間というのは、学生さんはS Aに行つて研究すると思つていた。僕もそう思つていて、要は研究課題をもつて外国に行くんだと僕は今でも思っているし、その当時から強く考えていました。課題のないS Aはちよつとおかしいな、物足りないなと思つていたんです。

自分の留学体験というのも、もちろん自分は研究する課題があつたから、それが外国にしかなかったから行つたわけでして、別に外国に行きたかつたから行つたわけでもないわけです。そこに行かないと勉強できないものがあつたから行つたわけなので、制度として学部制度に乗つかつて、外国である一定期間、身を置いて勉強するにしても、一人一人の学生さんは課題をもつて行くべきだし、

そういうものだろうと自分はいつも考えていたというのがひとつ。

そうすると、自分の留学や海外での業務体験もそうなんですけれども、どこにいても同じ条件で十分な能力を発揮して仕事をするためには、結局は情報のスキルというのは非常に高いものをもっていないとだめなんです。日本はかなり便利ですので、日本にいるのと同じパフォーマンスを出そうと思ったら、どこでも日本と同じ環境で仕事できないといけないわけです。それは通り一遍のことでは成り立たないわけです。裏表知り尽くしたようなITCスキルが必要になってくるだろうというのがあります。

それから、僕は文化情報学という言葉がすごく気に入っていて、気になっていて、今までそれをとっても大事に考えてきたんです。最初の年の学部のパネルをもう一回見直してみたところなんですけれども、このようにチャートがありまして、既存の研究分野の中で言語、身体表現、映像、文学というジャンルキーワードがあつて、それがこの学部の枠組みの中では矢印を発していて、それが全部集積され、分析され、整理される。要はこれが文化情報の受発信になるわけですから、この一番大きなくくりが文化情報だということなんです。ですので、例えば身体表現を研究するとか、映像を制作するとか、文学にこだわるとか、この手のすべての研究、あるいは創作活動というのは文化情報なんです。これは、例えばSAという期間を区切つても、あるいは四年間の学びを通じてでも、この枠組みを大事にすることは僕には非常に新鮮な、将来性のあるコンセプトなのかなと思いました。

情報といつてしまうと、データであるとか、コンピュータの上でやりとりされる知識というふうに物すごく限定的に捉えてしまうのですけれども、文系、理系を問わず、受信、発信、編集、分析、蓄積、流通などの知的な行為にかかわる対象物をすべて文化情報と呼んでいるわけです。それがなぜ大事かというと、我々が考える文化、あるいは異文化にすべてかかわってきているんだということなので、すごく広い研究領域というのか、対象領域を可能にしていると。教授会のお仲間の先生方一人一人を思い浮かべて、そういうところで勉強しているゼミ生の人たちを思い浮かべて、あるいはいろんな国に散らばって勉強している学生さんの顔を思い浮かべて、みんな含まれているじゃないかと。そういう人たちのやっている研究活動や学術活動は全て文化情報にかかわることだと思えたので、そういう何かすごく大きなコンセプトに自分も関与しているんだということが学としての未成熟とか、そういう新しさ、幼さみたいなものと引きかえに非常に新鮮な魅力であつた、今でもあり続けていると感じています。なので、スタディーアブロードにしても、情報学にしても、僕にとっては全部うまいぐあいに繋がっているというのか、溶け合っているように思います。

何かというと、情報をのけ者扱いというのか、

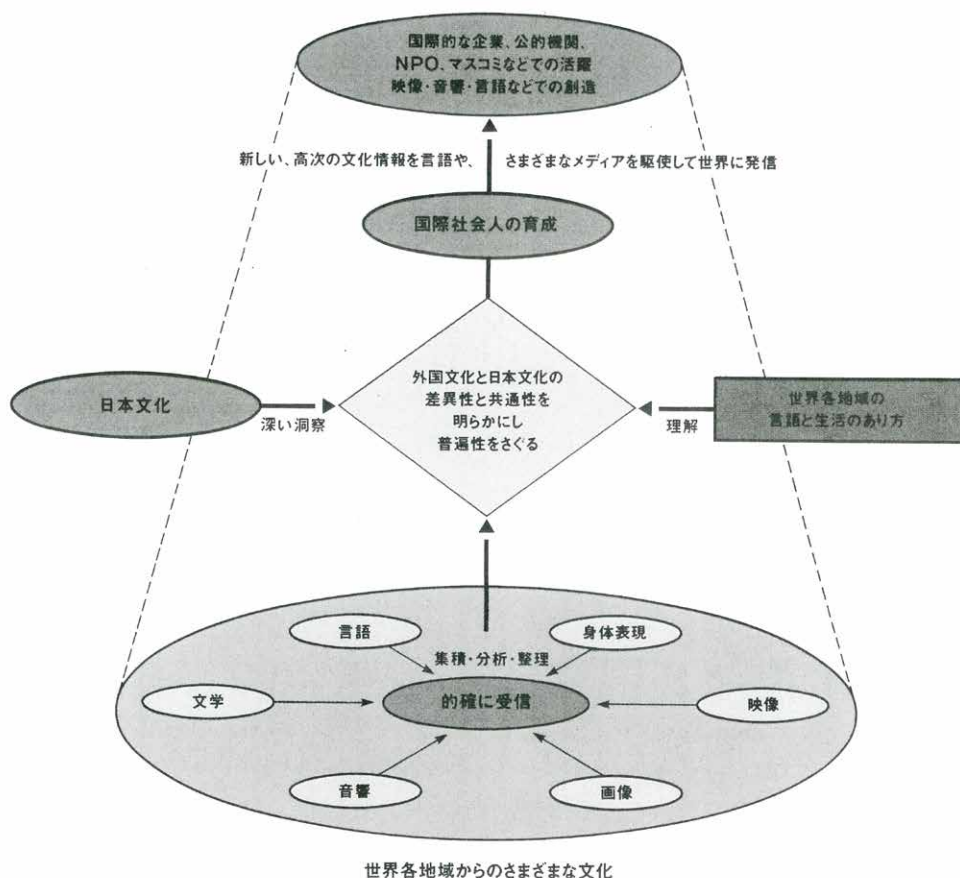
自分がやっていることと情報とは関係ないよね的な捉え方をしてしまう人を見ると、いつの時代に生きている人なんだろうと内心思っちゃう。ご自分もたくさんいろんなことにITCを使っているわけだし、そこから自分の方法論とか、そこから導き出されるものも大きく影響を受けているはずなんです。ところが、それが見えていない、あるいはそこをあまり認めたくないというのは非常に不毛だなと。

森村

背景として、情報と聞くとすぐコンピュータ、もしくはそうした技術というふうに通っちゃうというかなんていうかな。

大嶋

私自身は、すぐコンピュータ、コンピュータした人間なので、それでもいいんだけど、それだとほとんどの人は、情報とは何なんだろう、特に我々の学部で追求しているはずだった文化を成立させる要件というのか、そこに大きく関与している文化情報というコンセプトを自分はどう受けとめればいいのかというところを閑却してしまっってはちょっと寂しいなと思うわけです。



「1999年の改革—法政大学」より、国際文化情報学部の概念図

今の文化情報という話をもう少し展開していこうかなと思うんですけども、前にメールでこのお話をしたときに、川村先生の「異文化」第一号の「巻頭言」で大嶋先生が触れられていたので、おくれげながらというか、自分がこの編集に携わっておきながら、また読み直してみたら、まさに先見の明というのか、彼自身がいつていたことが、曲がりなりにもいろんな意味で大嶋先生がいわれた話にかみ砕かれていて、川村先生がの中で、文化情報学は新しいといったときに、三ページから始まる2のところですけども、ちよつと読みます。

「文化情報、あるいは文化情報学とは新しい概念であり、新しい学問分野である。情報学者の西垣通は、情報学（インフォマティクス）と情報科学（インフォメーションサイエンス）を区別して、情報科学は広義のコンピュータ科学（コンピュータサイエンス）だとしたら、情報学とは情報科学よりはるかに広大な知の領域を覆う学問であり、その関心は根源概念である情報を核として、炎のような知の空間を燃え広がっていきます。コンピュータ科学を含むのはもちろん、さらに多くのいわゆる文系の知をも海のごとく包摂していくわけです」と「心の情報学」の中で述べている。

その中で、情報に関連の深い学問として三つの丸印がある。言語情報を初め、諸記号の差異を研究する記号学、哲学、言語学などの関連分野。マスコミを初め、多様なメディア情報と社会、文化、歴史との関連を研究する社会学メディア論、メディア史など分野。図書館情報学など事物や概念の分類を研究する関連などが西垣さんの考え方として、「文化の情報学」としての文化情報学に関係する分野として挙げることができるだろうと。

これは川村先生の中での議論になっていって、その際に、数行飛ばした後に、「情報化された文化についてだけ研究することが文化情報学の対象関心領域となる。情報化されるというのは、何らかの記号化、象徴化、あるいはメディアによる複製化、伝達広報化、記録化というプロセスをたどっている。改めておかなければならないのは、情報は加工され、編さん、編集されて初めて文化情報となり得る」云々と書かれている中で、その対象領域は、西垣さんに乗っかっていえば、広大な知の領域なわけですよ。つまり、あらゆる学問、分野が全て包括、包摂されていくし、フィールドは地球上全部を含む、もしくは物理、化学を入れれば宇宙も含むかもしれないという感じですよ。

そうした中で、でも私たちがそれを川村流の概念でいう情報としてみれば、結局これは私たちが編集し、もしくはまさにそれよ

てそこに関与しながら集積されたものをまた分析し、また発信していくという形の、そうした一連のコンテキストを含み込んでいくし、そのときに気をつけなければいけないのは、彼もいつていますけど、情報の主体によるさまざまな変更です。誰がとどこでどういったかという問題が常に問われていくわけで、逆にいうと、どこでも高みの見物ができないという意味では、この情報は常にひもつきというか、色つきというか、バイアス絡みの問題を含んでいく。そして、それがまたさまざまな形で編集され直されていくし、その中で別のワットワークをまた引き込んでいくという有機的で、かつまたそれが巻き込んでいく、巻き込まれていくということも踏まえながらつながっていく。そうなってくると、俺はこういう学問をやっているから関係ないぜとか、俺はコンピュータの専門家じゃないからそんなこと知らなくてもいいんだよねという話はもはや通用しなくなるわけです。

こういう概念をつくって、そこにS Aでやっていくことも含まれていくし、自分自身の生活、自分自身が生きてきたような考え方も常に文化情報の発信源になるし、もしくは受信装置になって、またその頭の中や書く物、発言するものの中で編集され、チョイスされ、落とされていく。そうしたものがあある意味で文化情報学のフィールドといえばフィールド、もしくはフィールドといえないぐらいの広がり、そのように文化情報学を考えていくことですよね。

大嶋

そうだと思いますね。先ほどいわれた、常に出し入れするところで操作の主体になる人間、個々人がかかわってくるという意味において、文化情報を対象として研究することはコンテンツの研究ですかというふうに受けとめられることが多いのですが、そうではなくて、コンテンツには必ずコンテクストがついて回る。この二つが密接に絡み合った状況をきちんと引き受けるという態度が常に求められるということで、高みの見物では済まされない立場というのは、まさにそういうことではないかと思えます。

森村

結局は情報の発信主体、もしくは受信主体でありながら、常にそれがニュートラルで——こういつては哲学分野からいうとちよつとあれだけでも、ニュートラルなというものはあり得ないわけです。常に時と場所に限定されていく発言になるし、イデオロギーという昔の言葉でいっちゃうとそうだけれども、言い方は悪いが、ある種の偏りが出てきてしまうという意味では、それが必ずしも全て悪いわけでもないわけだし、それだからこそ、異文化というのはアメリカ文化と日本文化だよねみたいな話ではなくて、私なんかの考えだと、個人がこうやって大嶋先生と会話しながらでも、もってきたカルチャーされたものが違っているわけですから、これでも十分異文化交流にはなると私なんかは考えちゃうんですけどね。

そのときに、こうしたことが常に研究といっちゃうと大げさなのかもしれないから、学生さんたちが逃げちゃうかもしれないけれども、こういうことが一つのベースとしてあるからこそ、これがまた海外、SAに行った先でも、自分の家庭ではこうだったが、ホストファミリーのところに入ったらこういうことをやるんだよねみたいなのも十分な異文化体験というか、文化情報学のネタになると私なんかは思う。

学校で学んで、教室に座って、もしくは発表するから海外留学ではなくて、そこに行つて、コーヒージョップでコーヒを一杯注文するだけでも、もしかしたら相当なものが紛れ込んでくるんじゃないかなんてことを考えると、私も最初、この学部でSAを導入するときに、どうしても前者の学校で何かやる前にこちら側に何かないと、座つていてもただのお客さんだよねと思うような感覚の留学イメージをもっていた。

ゼミ生が帰つてきて、酒を飲んだり、合宿したりするプロセスの中で、彼らなりの体得の仕方をしてきた子たちが一期生、二期生です。彼らは結構感動するわけです。こんなことでも喜ぶのかと。まだ十五、十六年前では、今と当時とどれぐらい差があるのかわからないけど、高校時代まで日本を出たことがなくSAが初めてという子も随分いたので、まして生活を半年近くするつてそうそうあることじゃなかった子たちもいた中で、アメリカのホストファミリーにえらいどなられたんだよねという経験一つが、十九、二十の子にしてみれば、すごく現実的な異文化体験であり、結局それがもたなくて何かを支えていくコアになる。

その意味での文化情報学をSAとリンクさせていくというか、つながっているんだと、先ほど別の文脈で先生はそういわれたかもしれないけど、学生がそれを全てつなげていくようになっていくことを考えると、今度はそれをゼミに戻してきて、卒論を書くかせるというときに、今から考えると、もうちょっと何かつなげられる方法があつたのかなんてことを今思っちゃったりしたんですけど。

大嶋　　です。準備学習というのか、何を身につけさせた上で送り出すかという点においては、いろんなことをちゃんと見聞して書きとめて、自己分析できるようにするためのツールなり考え方の枠組みを与えて、そういう枠組みの中で研究課題をみつけるという態度なり思考を植えておかないと、熱意と語学力だけではうまくいかないと僕は思っています。

森村

先生がSAのボストンの短期をずっとプログラムの段階から入られて、十年ちよつと超えてきましたよね。短期のSAは後発だから。

大嶋 最近、外されちゃったんですけど（笑い）。

森村 でも、ボストンですと培ってきた短期のSAの蓄積があるわけじゃないですか。もしくは、それをこういうプログラムにしているというのもあって、先生はそこに最初からずっと携わってきて、外されちゃったとおっしゃったけれども、十年ちよつとの蓄積があつて、先生としてはそれをどのように受けとめ、もしくはそこで育ってきた学生とのかかわり、その点についてお伺いしておるかと思うんですが。

大嶋 あれはコスパが悪いんですよ。行つて帰ってくるだけでも同じ飛行機代がかかるわけで、そういう意味では、期間が短いけれども、ボストンという街は文化研究の対象としては非常に魅力的な土地ではありますし、滞在費も学費も高いということで、日割り計算すると選択上は不利なプログラムではあるわけなんですが、実は専攻科目の二単位として研究内容を書きとめて持つて帰るということを課していますので、それなりの教育効果は出ているんじゃないのかなと思っています。

SAの研究書をみますと、一番最初に失敗するSAの典型例としては、行つて帰ってきた学生がすぐよかったといつて、そういう思い出しがみついて、何がどこまで勉強できて、どういうことを身につけたのかを語らせようとするとちつとも説明できないという情けない例が挙げられていて、そういうことではもったいないなと思います。ただし、期間が短いですから、集中的にいろんなことを見て、歩いて、書きとめてということをしなないといけない。

それもあつて、プラットフォームとしてブログを使うのはそういうところもあるわけで、リアルタイムに情報を交換して、公開して、フィードバックが受けられるような環境を世界中どこでも持ち歩いて実践することが必要になるので、アメリカにいつ、常に片足は市ヶ谷に根を張つてということを目指してやってきました。

森村 大昔の話になって、大嶋先生が覚えていらっしゃるかわからないけれども、短期のSAが出たときに、私の友人の土志田ミツオさんがニューヨークのSchool of Visual Arts(SVA)国際交流のサブディレクターをやっていたので、そこでうまくコンビネーションを組んでやる予定でした。国際文化学部の非常勤もやもらった土志田さんというアーティストをお願いして、短期SAの企画としていいところまで行つたけれども、最終の段階で法政の試験期間がネックになった。こちらは行けても夏休み、向こうはどうしても八月頭から下旬までの間、九月一日から新人生を迎えるから寮をあけなきゃいけないからというので、七月半ばから来られないかという。

語学研修を二週間やった後に正規で三週間、授業と博物館回りとか、自分の好きなスタジオでグラフィックをやったり、油絵を描いたり、コンピュータをやらせたりと、そこまで組んでもらっていたんだが結果的に調整がつかなくて、急遽、大嶋さんにもうだめだと投げて、ボストンを再交渉していただいたということがありましたよね。

大嶋 覚えています。

森村 あのとくに、この企画は私なりの突っ張りでした。

もちろん語学ができなければ、向こうへ行っただけでは授業を受けても仕方がないので、英語を学びにアメリカに行くだけじゃなくて、せめて英語を使つて、お客さん扱いでもいいから向こうの授業に入つて、科目で一単位でも二単位でもとつて、もしくはそれ並みのレベルで、そこにいたんだということを彼らに一つもたせたかったなと思ったのです。それをビジュアルアーツと交渉しながら、それはどのくらいオプションでとれるんだろうかと。アート・ヒストリーは、最初にそんなに専門知識がなくても一年生の授業としてあるからとれるんじゃないかと、スタジオは幾らでも使つていいから、そこにチューターをつけるから、絵描きの手ほどきだったり、コンピュータグラフィックスの手ほどきぐらいしてあげるよという話が三週間でもいいからという話で。それでも向こうの授業の初級者レベルではあるけれども、語学ではなくて、テーマで科目がとれたらということを組んでもらうところまで来ていたので。語学ツールとは言い切れないが、その先に自分がやりたい、日本ではない文脈で勉強できるものがあつたら、モチベーションの一つとしていいかなと思つて、それを随分交渉してたんです。

だから今、先生の中でも、専攻科目で2単位でもという話の中で何をしたのかということ、帰国後、自分でちゃんと報告できる、もしくはそれを自分自身でまとめて文章化できるところが一つ大きな動機になったり、SAの意味の一つになるのかなと。語学のスキルアップはもちろん重要なことだから、別にどうでもいいとは絶対いわないけれども、もう一つの何かみたいなものがあつたらもつとよいのだろうなと思つていたので、今、先生の話を聞いていて、確かにお値段的なものとか時間的な短さという問題はあつても、その充実度みたいな問題をどこまで考えるかということも一つ重要なことかなと思つたので、昔話をさせていただきました。

大嶋

秋学期をいっぱい使つて学んでくる、各SAのプログラムにも、あちらが用意した、あるいはジョイントで開発した学習分野としては、文化と社会だとか、メディアだとか、そういうカテゴリーは幾つかあつて、その中で学んでくることはあるとは思ひます。

れども、そもそもそういう文化観とか価値観というのは自分のものではないんですね。相手国の文化なり、フレーム・オブ・レファレンスに基づいてつくられたものであるわけだから、それを相対化するきっかけなり視点をもった上で行かないと、相手国の文化に呑み込まれて、一生懸命勉強して、それでAをもらって、はいおしまいとなってしまうわけなんですよ。そういうところは、たとえレベルは低くても自分で研究課題をみつけて何かやらせるということに少しは意義があるのかなというふうに思っています。

森村

そこは私たちも自分の価値観、もしくは相手の価値観と比較したり相対化したりしながら、その中でまた何かを生み出していくみたいなもののアプローチってなかなか難しいじゃないですか。行ったら向こうにかぶれて、帰ってくると向こうのことばかりいつて日本批判をするみたいなのが中にはいたりする。

それと同時に、是々非々でいくという言い方は変だけれども、向こうも相対化されなければいけないだろうし、こちら側も外からの視点の中で相対化されなければいけないだろうしということの中で、いいとこどりというわけにはいかないが、学ぶべきものは学びながら、お互い自分たちのものでも続けなければいけないものと、向こうからの批判に対してきちんと答えられない限り、こちらも少し変わらなければなどかという観点が学生たちの中だけでも重要なことかなと思っていて、今伺っていて、相対化というのは結構重要なことかなと思っています。

その中で、短期ボストンの話も伺ってきましたけれども、今度は情報科目群、今カリキュラムが少しずつ見直されたり、グローバルという問題が出てくる中で、さっき立ち話的なお話の中でいったものに、学生が情報学、もしくは情報文化コースの科目群に対する拒否反応みたいなのが潜在的にみえてくる感じがします。これは私自身の観点からだけなので、どこまで妥当性があるかというのは問題があるんですけども、ここ二、三年というわけではないんですが、今までと変わってきちゃったのかなという感じがして、それはお感じになったことはありますか。学生の情報に対する価値観とか距離感というか。

大嶋

どこまで一般化できるかどうかは注意深く物を言わないといけないと思うんですけども、スマホ世代の一般的な、世間的な意味での情報スキルは劣化してきていると思います。つまり、コンピュータのこともインターネットのことをろくに知らずに入ってきた十年以上前の学生のほうが、結果的には情報に対するセンスも能力も世間的にいうとすぐれているということが一ついえるかなと。でも、それは学生さんの質が変わってきたと一言ではいえなくて、中等教育で情報科という教科がどのように扱われて、情報の概念、

我々の言葉でいうと文化情報という非常に広い意味範囲をもつ概念をどれだけ捉えてきたかということが関係しているのではないかと思うんですね。

この学部で提唱していた、あるいは今でも言葉としては残っている文化情報という——これ、僕は、自分が英語で説明するときにはカルチュラル・アーティファクト (Cultural artifact) といっているんです。だから、森村先生と甲先生が「知的人工物」といっているものとうまく重なりますよね。人間の知恵の産物でつくり出されたものというのは、どのような形であれ文化なるものの形成に関与していくわけなんですよ。だから、「ここからここまでが文化情報で、あそこは違いますよね」というものはなくて、およそ人間の手にかかったものは全部文化情報になるわけなので、高校の情報科目ではそういう視点で物を教えていないだろうなという気がしているんですね。

だから、週に一回、コンピュータを使う科目があつて、そのときだけタブレットとかパソコンを出して、何かやらされて、はい、おしまいみたいな。ほかの科目で調べ学習とかをやるときは、「インターネットは嘘だらけだから見ちゃいけない」とか、そういう分断された状況の中でやっていたりとか、受験科目の中で、あるいは高等学校卒業資格の中での必要な素養なり知識基盤としての情報なるものを捉え切れていないので、情報科目を数学の授業に使っちゃうとか、よくおできになる学校ほどそういう傾向が強かったりするんで、言っていることかどうかわからないけれども、未履修という問題は実はまだ存在します。

森村　そうですか。

大嶋　はい。そういうのが一つありますね。それに対して例えばアメリカの中等教育の情報の捉え方というのは、「インターネットつてすごいね。インターネットのおかげで世界中が図書館だよ」という一言で始まるんです。スタディーガイドなんかはそういう始まり方をするんですよね。だから、出発点からしてそういう違いがあると、その上に積み上がってくるものの豊かさが全く違うと思つています。

森村　先ほどのSAのパンフレットじゃないけど、地球が研究室につながるように……

大嶋　世界中が図書館です。そこには害悪をまき散らす本もたくさんあるわけだけでも。

森村　まさに先生がいわれたように、カルチャル・アーティファクト、知的人工物、甲先生もおっしゃっている部分。そもそも人間かか

かわらないような外つてないじゃないですか。だから、授業の中でも、環境といっても結局「人間環境」でしようみたいな話になっちゃつて、人間を離れた自然は、逆に人間が立ち入れないような——今はドローンで人が行けないところも飛ばせるのかもしれないけれども、少なくともそれをみる限りにおいて、もう既に私たちの視野に入り込み、私たちがその情報を編集しながら理解していくわけだから、そう考えたら、「全くの外部」みたいな発想自体はもはや成り立たないという現実の中で、それが既に文化の情報として把握されちゃっているわけですよ。つまり、世界観の問題というか、哲学的にいっちゃえば、地球観、宇宙観の問題にもかかわってきます。そういうところから単にコンピュータ、スマホを使うから使わないから、あたかも俺には関係ないよという切り方はもはや通用しないのになど、今のお話を聞いていて思うわけです。

そもそも世界が変わってしまった。大航海時代前みたいに、海の向こうは滝になっていて落ちちゃっているよねという世界観が、マゼランじゃないけど、地球一周してみたら戻ってきたみたいな話ぐらいの世界観があるわけです。今、もはや情報としてというか、私たちの全て携わるものや認識できるものを超えて、想像もつかないといったら本当に想像もつかないようなものは、もはや考えてもしようがないけれども、想像がつく限りにおいては全てが情報化されているというか、さっきの川村先生の文書じゃないが、既に文化の中に取り込まれているから、そのほうが文化なんだということですね。

そういう中で、今のお話を聞いてちよつと愕然としたのは、相変わらず未履修であつたりとか、パソコンを閉じれば別の世界が待っているとか、こういう世界と私たちは関係ないんだよねと思っているような、学生や一般の人たちがいる。これは教育になっちゃうんでしょうかね。

大嶋

その辺はよくわからないんですけども、今のお話で一つ思い出したことは、この学部に来て十六年ぐらいになる中で、いろんなところで聞く言葉として、語学とかコンピュータはツールだよねというお話をする人がいて、僕はこのフレーズに非常に抵抗があるんです。つまり、身につけること、かかわることによって自分の変容することについて全く気がついていない物の言い方なんじゃないのかなど。つまり、何かをしたい自分、何かがある自分というのが初めにあつて、それを実現するために、例えば語学を勉強するとか、コンピュータを使いこなせるような——使いこなすという言葉が非常に曲者で、そこには目的意識なり到達点みたいなものがあつて、これが身につけば自分は自己実現に近づくといいような、何かしら狭溢な誤解があると思つています。

実は語学もそうだし、狭い意味でのICT、情報もそうなんですけど、自分がかかわることによって自分が影響されるんです。そうすると、使いこなしのあるもののアイデアとか境界点の質そのものが変わってしまうわけなんです。だから、のっぴきならない関係にあるということがなぜ見抜けないかなということなんです。ノートPCを閉じてしまうと別の静かな世界が目の前にあるというのは、まさにその辺のところに気がついていない人たちの牧歌的な発想というか、今の時代に生きていてそんなことあるわけないだろうと思うわけです。そういうかかわりの絶ち切り方をしている限りは、豊かな社会的存在としての営みは望めないと思うので、余りにももつたいないなと思うわけなんです。

小さいときからいろんな物の考え方であつたりとか、インターネットとかコンピュータとのつき合い方の中で、少しずついろんな場面で教えていくということをやらないと、週に一回の切り離された空間、時間の中での授業とかでは到底追いつかないものがあると思います。いつてみれば、全ての科目の中で情報、文化情報は取り扱われるべきだし、あるいは既に取り扱っているものをそういう眼で見るということをもう少し意識的にやつておくといいいのではないかなと。

大学の中で、情報の専門科ではなくて、情報科学科ではなくて、一般の学部教育の中で情報をどう教えるかという見直しの論議が始まっているんですけど、その中にはようやくというか、西垣通氏が基礎情報学の中で提唱された、まさに川村先生が『異文化』の巻頭言で引用された「人間がかかわってくる文化と情報」という概念が取り扱われているんですよ。だから、やるべきだということとは非常に切実に意識されてきているとは思いますが、現場は追いついていないんじゃないかということです。

我々のところでは、情報も一つのジャンルではあるんですけども、入門科目の中で一つのセクターをもっているんで、そういう考え方を学生さんに直接働きかける機会には恵まれているんですね。ないよりはましというか、これがあるだけで大分違うんじゃないかなと僕は思っています。

森村

たまたま私、いろんなテーマでゼミをやつてきて、最初はアート、デザイン、建築、都市とかというのを一期生からやつて、その後、別な角度からというんで、今は精神分析とか心の話をゼミの中でやっています。これは私の興味の動く範囲でゼミ生を引きずり回しているだけなんですけれども、その中で言語の問題を、単に何語を習いましょう、学びましょう、使えるようになりましょうというレベルじゃなくて、今、先生のお話を聞きながら、私なりのほうに引きつけていうと、言葉が変わると意識が変わる、意識が変われ

ば世界の見方が変わるし、世界の見方がかわれば、またそれをいろんな自分の心に反映してくるし、その言葉がそれをまた色づけていくみたいな。つまり、言葉と意識というのは密接に関わっている。意識なしでは言葉は使えないし、言葉なしでは意識が堅固化されないで、当然のことながら意識という働きもうまく生じてこない。

そうなってくると、一つの言語が、まさにネイティブ並みとはいわないけれども、英語をしゃべる瞬間に英語頭にならないと英語が普通に出てこない。そうなったときに、日本語で考えている自分と英語で考えている自分というものが比較できるポジションには当然立てないので、ある意味でいうと、そこが変わってしまうわけですね。

こうした意味で、単に言葉は、これを覚えましたが、これを使った。でも日本語でいったから、今度は日本語を使いますというように、とつかえひつかえラベルのように切りかえられるわけではなくて、総ぐるみで頭がとりかえつこにならないと実際はしゃべれない。だって、それを英語でしゃべろうと思ってる思考ですら、またもう一つメタレベルの言語で考えているわけではないので、対象（オブジェクト）レベルの言語で考えなきゃいけないじゃないですか。もちろん翻訳みたいなことを介せば、日本語でこういうから、英語でうまい表現は何かなどいつているときの英語は、確かに道具っぽい部分があるかもしれないけれども、もう少し生活していく中で、そういう時間が間に合わなくなつて、こちら側で考えるしかなくなるよねとなつたときの頭とか世界とか意識は、もはやツールとしての言語を使っている英語頭ではなくて、英語になつている頭になつているというふうに意識が変容してしまうと理解できる。

精神分析の本を読んでいるとおもしろいなと思つていたのは夢の話です。同級生が大学生のときに、毎日ドイツ語を読んでいるうちに、俺、ドイツ語で夢みちゃつたという話をしてた。そのときに、本人はすごい感動したらしいんです。つまり、フロイト的には無意識も言語化されているのかもしれないけれども、そこから夢が立ち上がってくるのが、俺、ドイツ人とドイツ語でしゃべっちゃつたよみたいな話をしたと。だけど、起きたときにはすっかり日本語になつてた、だから思い出せないんだ、またドイツ語で夢をみたら思い出すんだろうなみたいなことをいつていた。何だそりゃとかそのときは思つていたけれども、世界が変わるというか、言語が単にラベルのようにとつかえひつかえ張りついていけるようなものではなくて、相当なレベルで変容し始めてしまう。

つまり、文化というのは、さつきいったように、文化とその外みたいなことを考えたときに、文化を出て別の文化に移っていける何かニュートラル——さつき高みの見物と別の文脈でいいましたけれども、ここに立っている自分が、あたかも高みの見物をしてい

るようなもんじゃなくて、Aに入ったときはAになって、Bに移ったときはBになっちゃっていて、もはやAのことは全く見えなくなっちゃうみたいな、いわゆる決定的な外みたいなものがないんじゃないか。つまり、コンピュータ環境とか言語環境という言葉で環境とくつつくけれども、それが世界だと思っちゃうんですよね。だからツールに……。ご飯を食べるときははしだけでも、肉を切るときはナイフとフォークだねみたいな形で、食べている自分とは関係ない、道具をとりかえればという話ではもはやないのが言語、もしくはこういったカルチャル・アーティファクトみたいな世界なんだろうなと思うんです。

もはや「自然」という「アーティファクト（人工物）」みたいなものなんだろうなみたいな感じがしていて、人間が立ち入らないような「外部としての自然」みたいなものがあるわけじゃなくて、そこに行けばエベレストも自然じゃなくて、人間の環境だよねみたいな、何かそういう文脈でコンピュータとか言語とか文化物というのが存在していて、もう切り離せなくなっている。それどころか、その中に私たちは生きちゃっているんだと考えていく上で、では自分がどんなテーマで議論していこうかという問題が問われてくる。今お話を伺っていて、そんなふうに私は受けたんですけど、間違っていますかね。

大嶋

いえいえ、そうですね。特に言語と情報の相互関係というのが、これだけネット社会が浸透してくると、地理的に分断されていることである種保証されていた、わかりやすい意味での文化の独自性は大幅に浸食されてきつつあるわけです。

ちょうど入門科目だったり、言語なり文化表象なりを扱うような話題になったときに、例えばスペイン語やフランス語の文化圏みたいなものが、旧宗主国と植民地との間での問題というのか、そういう見方で研究されてきているものが、ネットで世界中がつながってしまった結果、それぞれの言語文化圏の形が塗り変わってきているというのか、もう一回つながってきている。例えば、SAでどこかに行くとか、特定の地域文化を学ぶ、研究するとかというときに、この問題を抜きにしては語れない状況になってきていると思いますので、そういうセンスは大事じゃないかなと思うんです。

悪い面をみると、例えば少数民族の言語の問題なども、メジャーな言語がどんどん世界中を席卷する、いわゆる英語覇権主義みたいなものがあつたりとか、そういうものが言語の消滅みたいなものをよりスピードアップしてしまっている、加速化してしまっているというような一種悲しい側面もあるわけです。それを単にテーゼとして悪いことだ、あつてはならないことだと考えるのはちよつと物足りなくて、そうなっちゃっている状況をどう受けとめるかというほうがより現実的かつ将来志向だと思うんですよね。

そうすると、異文化間だとか、そのようにいつていたときに、かなり線引きされて、もう既に向こう側へ行くと全く違うものがあるとは考えられないというのが、人・物・金の移動、さらに情報で世界中がつながってしまったという悪い意味でのグローバル化・シオンに対してもっと危機意識とか当事者意識を我々はずっと持っていていかないといけないんじゃないかと思うんですよね。これはコンピュータの専門家だけが取り組むべき問題では全くないわけなんです。

森村

それこそ人・物・情報の移動みたいな問題、よくフィジカルには国境線が地図上にあるけれども、常に情報はとめどなく流れてくるし、交雑してくるわけです。トランプ大統領のように、壁をつくって移民を阻止する、まさにフィジカルだけど。しかし情報の世界、もしくは流通の世界は、それによってもはやとまらなくなってきたような形にあるわけですよね。だから、第一主義といっても、基本的にこうなってしまった、よきも悪きもグローバル化されてしまって、人・物・情報の流動というものがもはやとまらないときに、自分たちだけで城壁を築いていく、それが対処法ではないだろうという話にもなっていくわけじゃないですか。

これから年度、この『異文化』を、入ってくる一年生に配るわけですけれども、そうした中で、私たち情報文化のコースの中にいる人間もそうですし、そうじゃないコースの先生、つまり、この学部にいる先生方が、自分のフィールドといわれている専門分野で、こうしたものに対してどういう形で対峙するのか、問われると思うんです。こうした状況変化の中で、今のお話の延長でいえば「文化情報学」、例えば九九年度立ち上げから「文化情報学」を展開、発展させてきて、そろそろ二十年になるうとするものに向けて、次のステップといたらいいんでしょうか。次にそこに移らざるをえないさっきのスマホ世代の子たち——私も先ほどああいふ問題提起をしたのも、情報と聞くだけで、なぜかよくわからない拒否反応とか、この間の座談会るとき、英語圏にS Aに行ったら、もう英語は結構で、全部英語じゃないところとか、語学と情報を何で避けていくのか。さっき、抜けられないと先生とのお話の中で出てきているのに、学生たちは、なぜかS Aに行ったら英語はもういいやとか、そんなに情報、情報やらなくても、スマホを使えるから別にいいやとかというレベルになる。私には何でそういうネガティブな反応につながっちゃうのかなという疑問が片方にある。

そうなったときに、国際化学部や文化情報学というものを学部と同時に立ち上げ、不幸なことに、看板は「情報」がとれちゃったけれども、これだけはといって、パンフレットにずっと残し続けてきて、文化情報学の科目をつくり、学会名としても残し、だけれども、もしそれがただの名前としてしか機能していないんだとすると、これはゆゆしきことというか、悲しい問題でもある。

だとしたときに、次のという言い方がいいのか悪いのかわかりません。別に時間ができるからというわけではないけれども、創設二十周年を目前に控えて、まだ時間があるうちに、二十周年記念をやるのかやらないのかはそのときの学部長にならないとわからない。でも、創立二十周年の何かイベントであったり、シンポジウムであったり、もしくは卒業生のおもしろいやつをピックアップして、二十年ぶりに里帰りさせて何かさせるなり、いろんなことがあるだろうし、そうやったものを企画してもいいかなと思ったりもするときに、では、在校生たちや、そのときの在校生や、今これから欲しい子たちに何をどうすればいいか。直接的にはカリキュラムという問題かもしれないけれども、もう少し理念、理想的なものを、大嶋先生、何かプランとか考えとか思いつきでもいいから、あつたらちよつとお伺いしたいなと思うんですが。

大嶋

断片的にはいろんなことを考えたり、思ったりするんですが、コースとの絡みでいうと、僕はコースというのは非常に違和感がありますね。いろんなところでしつこく発言を続けてきているのは、一学年二五〇人、一学部一学科、それ以上でも以下でもないというのを、まるで四つの専門があるかのようにして、自分が興味のあるところ以外は関係がないかのように振る舞って皆さん平気なんですかということなんですよね。

僕の理解の出発点としては、コースとはさまざまな学問分野の中での領域の広がりであるとか、分野の中心的方法論なり軸なりの中での積み上げみたいなものを整理するためのジャンルキーワードみたいなものにすぎないはずなんですよ。例えば、副専攻を立てようとかという議論もあつて、それはすばらしいことで、確かにそれはやるべきだとは僕も思いますけれども、立ち上げたときの理念からいうと、好きなものだけ食べていても強くなれないよというようなもの、しっかりと骨組みのある体をつくるにはニンジンもピーマンも食べなさい、だまされたと思って全部やってこらんとするのがこの学部だったはずなので、それは今でも変わっていませんね。ただし、最大公約数的に何を目指すかということでは自分でもこだわっているところがあつて、やはり学部ですから、主たる研究対象が何かということと、これをいうと嫌われちゃうんだけど、親学問って何ですかという話と、人材育成なり学術研究ですから、それによって実現されるもの、目指すものは何ですかということがあると思うんですよ。

それは、いつだったか、森村先生とも議論しましたけれども、コースができて何年目かに、学部の英文の紹介ページを書くとき、各コースが特徴を自分であらわすように提案してはどうかというもちかけがあつて、それがまさに今、僕が気になってい

ることもあるわけで、情報文化コースとしていうことで、対象はカルチュラル・アーティファクトですなと。いわゆる知的人工物、人間の知恵の産物で文化の成立なり関連にかかわり得るものは全部何でも扱うぞと。親学問は何かという情報学、インフォメーションサイエンスではなくて、インフォマティクスということにしましょう。ただし、ヨーロッパでは、インフォマティクスというのは情報科学として捉えられているんですよ。なので、それは括弧つきのインフォマティクスで、少し説明を要するのですが、別の言葉でいうと、人文科学の中での方法論を支える一つの分野としてのICTも含めるという意味で、縦軸、学問の高み、情報とは何かというのを問い直す、問い続けるスローガンとしてはインフォマティクスでいいんですけども、いろんな分野を包含する今日的な文化状況を射程に入れたキーワードとしては、リベラルアーツのかわりに「インフォアーツ」。これは大原社会問題研究所の講師だった野村一夫さんがある本の中で提唱されていた言葉で、造語です。そんなに社会的な認知度も高くない。だけど、僕は結構気に入っていて、説明するときによく便利なスローガンなので、入門科目では使ってきました。

ということ、研究対象というか、扱う対象についてはカルチュラル・アーティファクトで、先ほどの繰り返しになりますけれども、これは必ずしもコンテンツ研究ではないということもあります。コンテクストを含めての取り扱いで、しかも分析するだけだと論文を書く人以外は救えなくなっちゃうから、では作品をつくる、編み出す、つくり出す、クリエイトすることに関しても含む。

それから、最近はまとめサイトのスキャンダルなどで嫌われる言葉になっちゃったけれども、僕が割と昔から考えていたのはキュレーションということです。つまり、つくり出されたものをもう一回整理して、別の切り口でみせてそこに価値を創り出していくという仕事も、高い別のレベル、メタなレベルでのカルチュラル・アーティファクトに対する営為ということ。さて、それでは目指すものは何かということです。

そこで、インターカルチュラルというのがちよつと気になっていて、少し危なっかしい言葉だったんだけど、森村先生にも相談して、あるとき「トランスカルチュラル」といっちゃったんですね。そこで、こいつら何いつているんだというご批判なりお叱りなりが来れば、またそれで自分たちのことを考え直せばいいのかなと考えていて、世間知らずがけんかを売るような感じなんです、すかした言葉だけど「トランスカルチュラル」といつてみたかった。

なぜかというと、大学院の議論でも問題になったんですけど、インターカルチュラルコミュニケーションというのは応用言語学の

一ジャンルに過ぎないのですよ。なので、学部が広く目指しているものを、ある分野では非常に固定的、限定的に受けとめられている言葉をそこに割り当ててしまっているんだとかという自分としての抵抗感があったということ。

もう一つは、必ずしもそうではないかもしれないけれども、インターカルチュラルといっちゃうと、こっちに文化があつて、あつちにも文化があつたと。そもそも文化というのは非常に多層的な、折り重なってまざり合っているようなところで、その境目とか階層みたいなものはつきりみえないようなものがのびきならない問題を引き起こしているんだと。それを乗り越えるなり、そこと対峙というのか、そこと日々向き合っていくための何かをみつけるために我々は研究しているんじゃないのかと。

だから、三つのキーワード、まず扱う対象としてのカルチュラル・アーティファクト——このときのカルチュラルは、何がカルチャーとかということは無定義概念としてもう使ってしまったています。だから、本当は怪しいんです。だけれども、カルチュラル・アーティファクト。これは研究対象なり創作なりの対象として考えた。次に親学問は何かというと、広い意味で「インフォマティクス」、あるいは怪しい言葉ですけど、「インフォアーツ」みたいなものがその底辺というか、広がりを支える言葉としてあってもいいなど。最後に目指すものは何かというと、「トランスカルチュラル」ということで、これで自分としては結構納得しているんですね。

コースに対する説明になっていますけれども、このキーワードは、実はその前にあつた文化情報コース、あるいはもっと広い意味での国際文化学部国際文化学科の中で緩く全部に当てはめても嘘や矛盾のない枠組みになっていると思います。

森村

議論がはつきりなってきたなと思って、すごくうれいんですが。私もこの四コース、もしくは学科、専攻みたいな話にどんどん細分化していくような流れがあるんだとすると、それは逆コースだと思っていて、そういうのを批判したからこそ国際文化をつくってこういうと思ったんじゃないかなと思った。

結果的に、四コースあるうち、どういうわけか、私は三つのコースに属さざるを得なくなってくるみたいなきっかけが起こってきて、そのときに教授会で、どこか自分が中心になるところに二重丸をつけてくださいといったときに、どこも二重丸がつけられないみたいな話になる。そもそも自分の専門や興味を四つのコースに割りふるのは無理だからと思っっているわけです。そもそも国際文化って、文学部みたいに哲学科だ、日文だ、英文だ、○○だというふうにやらないから一学科でやってきたんでしょう。まして、さっきいわれたように、定員数が最初に二〇〇しかなかったわけで、それを三つも四つも分けちゃったら、もうそれだけで何をやっていくのと

いう話になってくるし、そもそもそういう垣根を取っ払って、まさにさっきいった文理融合も含めて、あらゆるジャンルやあらゆるテーマが常に複合的になるからこそ国際文化なんでしょうという話でやってきたはずだったのを、またぞろ専攻で分けたり、コースで分けたり、そして垣根を高く壁をつくっていくというのは、また何十年前に戻るような学科編成になってしまうような気がして、こうなつてくると、私みたいに何をやっても中途半端なタイプの人間は所属先がない。それで情報の先生たちの仲間に入れさせていただいている。

先ほどもお話があつたように、そもそもコースという分け方に対してすごく違和感があるし、そんなことをいえば、どの先生だってベストなコースにいるわけではないはずだから。

でも、もう一度考え直してみたときに、国際文化がそもそもこの「文化情報学」をつくって、もしくは立ち上げて、その中でさまざまなものが専門を超えてまじり合うとか、その中でお互い同士が、先ほど先生がいわれたように「トランスカルチュラル」になつていかないと、自分が中心みたいなものと、お互いがこうやっている中で、その都度、インターカルチュラルでやっていくだけでは、もはやおさまりがつかないという状況と、そういうことを踏まえて、当時はインターカルチュラルという言葉をつけていったけれども、今回お話を伺っていて、もうインター（間／相互）のレベルじゃないよなという話だし、先ほどカルチャーといったときにも無定義術語という形でいわれたが、そもそももう一回カルチャーを考えないと。——それともう一つ、先生のご興味ある世界というと、サバルというの、もはやサバルどころのサブじゃないだろうと。

大嶋 まさにそうですね。

森村 片一方で、昔だったらハイカルチャー、ローカルチャーと呼んでいた。では、その高低差は何だったのか？もはやクラシックと美術館に行けばハイカルチャーで、ジャズやロックや演歌を歌うとローカルチャーみたいな話になっちゃうような話ではないし、漫画とアニメをやるのがサブカルチャーで、文学とか高尚な何かを扱えば高級文化なのという問題の上位、下位という問題ではない。つまり、カルチャーというものが、まさに全てなわけなんだから、あと考えると、そこに高低差や上下差があるという考えそのものがもはや問われなければいけなくなってくる。

さっきの話に戻れば、人・物・情報の流動化の中で、もはや在日だけがとか、在米だけがとか、そういう問題ではないじゃないですか。

民族間がどんどんハイブリッドになっていくし、人間と物と情報が流れてくる中で、カルチャーそのものがしつかりしたカテゴリーとして、かつての「文化と自然」みたいな言い方だとすると、「ネイチャーとカルチャー」の対比だよなという二項対立や、そうした基軸では語れなくなりつつある中で、カルチャーそのものが全部文化情報のネタになるし、○○語圏みたいな形でなくなくなりつつあって、境界線がどこにでも引けなくなりつつある。「ボーダレス」というとちょっと前の言葉になっちゃうけれども、既にもうボーダレス、もしくはもうフローになつて流れてきちゃっている話になっている。

では、どうしたらいいか。研究のあり方や分析対象やフィールド、もしくはそれを目指す学問性みたいなものを確保するかといったときに、まさに状態としてのトランスカルチュラルな状況の中で、扱うものはカルチュラル・アーティファクトとしかいいようがないような、ハイとかローとかもいえないような水準になりつつある。それを「文化情報」として捉えつつ、「インフォマティクス」という広い情報学の中で分析していく、そしてまた提言していったり、次に出していく。それが国際文化の二十一世紀バージョンというか、これからのというものもあるのかなと。

先生の大変ご興味のあるサブカル領域も含めて、今のお話にもう少し色をつけていきたいというか、きれいな下地をつくりつつ、もうちょっとカラフルにしていきたいんだけど、もう少し具体的なプランとかお考えとかというのがあったら、今の話に引きつけながらも。

大嶋

そこはまだ予測していなかったです。

森村

今、文化情報のコースの見直しというか、外に向けていくときの作業課題として出てきたような親学問、インフォマティクス、インフォアーツ、そして対象がカルチュラル・アーティファクト、目立つものとしてトランスカルチュラルという問題のある1つの学問配置というか、そのカテゴリーなり枠というものがあつたときに、それを各先生たちやご自身の研究分野と絡み合わせながら、コースという垣根も今いろいろところで見直さなきゃねという話も個別には聞くけれども、教授会レベルで議論になるまではまだまだ時間がかかるのかわからない。

先ほど象徴的な言葉でいったのは、鈴木晶先生が今回定年でおやめになるときに、晶先生の後任人事をめぐる問題も含めて、岡村先生から表象文化コースの人員不足についてのSOSが出たりとか、大嶋先生もリアクションされた、島田先生ももう少し垣根を越

えてある程度教員間の流通をしないと立ち行かなくなっていくという事を言われている。ここまでいっちゃうと失礼だけれども、立ち行かなくなってくるから、表象文化に人間を充てればいいのか、情報文化に学生を呼べばいいのかという問題になっちゃうと、またちよつと違うんじゃないかと私なんかは思っている。

そうじゃなくて、そもそものがこの“国境線”を排さないといけないというテーマで話をもう一回もんでいかないと、次の段階になかなか行きにくいんじゃないかとか、そこをどこかに定位しながら、きちんとした議論をしていく中でコースを撤廃するなり、考え方をもう少し変えていくなりしていく。足りないところはまた欠員補充だ、こつちが抜けたからまた欠員補充だという形で、正直いうと、同じジャンルの先生が来ることは二度とないわけで、もはや新しい先生は新しいことをやりたくていらつしやるだろうから、あなたは情報文化だから情報文化ねとか、あなたは言語文化だから言語文化ね、〇〇語だけやっていけばいいという話じゃない。こういうのは失礼だけれども、ここまでも、これから何年かの間に相当のメンバーが通常でいなくなりつつあるわけですね、全共闘世代が多いもんだから。この現実の中で……

大嶋 その次にいる僕ももう余り長くない(笑い)。

森村 正直いうと、昭和三十年代の人たちが還暦に入り始めているじゃないですか。だから、定常の定年ということから考えれば、定年になっておやめになる先生方が続々毎年数名ずついらして、そのたびごとに人事委員会で、次のその枠をどうやって確保するかどうかの問題も含めてですけども、その科目ジャンルであるとか、そうしたときに、おのずとカリキュラムを見直さざるを得ない状況が割合切迫的にあるんじゃないかという気がする。

その中で、でも国際化学部をつくったときの理念や理想や、三ボリシーの議論が起こっている。こういうっちゃ悪いけど、その議論が瑣末な部分にもみえてきちゃって、もっと大柱が必要な部分を考えることにもう少し立ち戻るべきかなという気がしていて、十五年前は何する学部だったか?と。学部創設世代やその後の世代の先生方、年齢とは違った形で二〇〇三年に第一教養部から移籍された方、最近の新任の先生も含めて多くなりましたよね。だから、年齢からいって十五年選手の先生たちが徐々にいなくなっていく。それをきちんと継承、引き継ぎをされないままフェードアウトされていっちゃうのは、内心ちよつとおもしろくない。

それを何とか組み直すためにも、新しい先生にも、この学部はこういう理念、方針と、こういうことを教育目標にしていました。

こういう学生を育てて世界に出していきたいんだという、そのデザインが個別の科目の引き継ぎと、この担当ができる人をみたいな話で終わっていつちゃっているような気がする。それが何とも歯がゆいという感じがしている。文化情報を情報文化とひっくり返しただけで全く違うものが意味されちゃうのが、実は私にはすごくおもしろくない部分もあって……。

その点に関しては、前の制度で使っていた国際文化、文化情報という名前をそのまま残すのはまずいという配慮がどこかで働いたんじゃないのかなと思っているのと、文化というキーワードの上に何か修飾語句を乗せてつくる。そうすると、国際社会のところは国際文化といつちゃうと、学部学科名とコース名がイコールになっちゃって、これはちよつと強過ぎるよねということと、そこだけ国際社会にしたというのがあとのときの議論だったと思いますので、僕自身は、情報という言葉を残したということと、学部全体を大きくくり束ねるものは文化なんだということが保たれたという点に関しては大きな不満はないんです。

しかし、さっきの英語名称のところに戻っちゃうと、僕がすごくまずいと思うのは、コースによつてはこういう対象領域、つまり共通に束ねてもっている対象領域と方法論みたいなものについて、英文の名前が余りにもぼんやりし過ぎているような印象もあって、情報文化コースだけはインフォマティクスとか、アーティファクトとか、トランスカルチュラルとかいつて尖りまくっているんだけど、真面目に尖っているつもりではあるんです。ソサイエティーとか、カルチャーとか、そのこと自体を説明するのに物すごく文言を要するような、余りにも一般的な言葉をそのまま残しておくことはよろしくないとか、そこをはつきりさせようというのはあるわけですよ。いやしくもコースを名乗るんだったら親学問は何だよ、いつてみるというのが僕のチャレンジというか、それから研究領域は何だよというのがちよつとありますので、研究者として我々が取り組むべきものはそういうのがあります。ここはそれぞれ結構自由であつて構わないと思うんです。

だけど、カリキュラムとか科目ということになると、いわゆる大きくくり化みたいなのねりがすぐ次に控えてきているわけです。そうすると、余りにもエキゾチックなものという言い方は悪いけど、この先生の授業だから好きなんだとか、これを教えられるのはあの人しかいないみたいなのが全部なくなっちゃうと思うんですね。つまり、もつと少ない科目のもうちよつと整理されたシステムの中で複数の人が担当できるようなものに落とし込んでいかないとだめなので、そういうことを言い始めると、自分が教えられるものとか教えたいと思っているものと仲間の先生がやりたいと思っていること、やるべきだと思っていることをどんどんすり合わせて、

歩み寄って、練り上げていくということを全部のジャンルでやらないと……。

いつだったかのカリキュラム改革のときに、コラボレーション科目をつくっていくというプロジェクトが随分あったじゃないですか。今それがどうなっているんだろう。たまたま甲洋介先生と私は、いまだに「こころの科学」に関しては続けているけれども、そういう違うジャンル、私と甲先生みたいに、情報学と哲学は油とはいわないが、全くアプローチがちがう。それでも心はどちら側からもアプローチすることができる。認知ということを考えていくとか、メモリーは機械の中のメモリーを考えていく、人間の脳みそのメモリーを考えていくという問題で、記憶というのをどのように考えていくのかというのに、心というキーワードでアプローチしていく。

研究の親学問は違っても、テーマとか対象に何とかそれをわかりたいというところで、哲学がアプローチするとか、情報学でアプローチするとか、今はやっていないけれども、先生がいらないからで、例えば脳からアプローチをする。そういったことがあつてある種のインターカルチュラルというか、インターディシプリナリーだったりする部分があつたりとか、どこからアプローチしてもいいけど、とにかくこの謎だけは明らかにしたいとか、解けない問いを解いてみたいとか、そういう知的好奇心も含めてですよね。

そうしたものが少しでもあるようにしておくためには、なるべく垣根を作っていけないほうがいいんじゃないか、垣根をつくらないほうがいいんじゃないか。いつでも情報交換をしながら、それがうまくこちら側に入ってくれば、これはこういうことかなという形で練り直すことができる。だから、先ほども先生がいわれたように、複数の人たちがさまざまな、一つは、私は重要だと思つていけるけど、師匠と弟子みたいな形での免許皆伝みたいな筋があつてもいいのかなど。自分もそのように育ってきたから、一子相伝というわけにはいかないが、なるべく自分の学問的継承性みたいなものも含めて、でもそのテーマは常に一般化されなければいけないという意味では、師弟関係だとか教育関係として学生と教員という関係はそれなりの構造があつてもいいと思う。しかし、やっているテーマは常にオープンでないと議論が成り立たなくなつてしまつて、ほとんど秘儀になつてしまう。

だから、その意味で担当がさまざまな形で交代しても、学問の根っこだけのオープンさというものはつながっていくということがあつて、それが秘教的、秘儀的な形にならないように、学問は常にオープンであるし、誰でも参加、介入が可能であり、そして、それをもらつたら必ずちゃんと引き受けていつて、またそれがそういった先で展開されていくような形であるためには、この先生がや

めたらこの科目はもてないんだよねみたいなことはまずいですよね。その科目に人がくつついているわけではない。常にその学問がちゃんと継承されなければいけないけれども、その人のわざは別の人が代替できるようにしていかないとやはりまずいだろうと思っています。

そういう意味で、先生がいわれているような、いろいろな形ですり合わせていく中で、また新しい別の科目が立ち上がってくるのもいいのかなと思ったり、そうした知的衝突が起こったり、知的融合が起こったり、いろんな介入者が入ってくる中で、学問とか研究の深みとか広がりが出てくるのかなという気がちよつとしました。

さっきサブカルを強引に振ったのも、先生のfacebookをみたり、いろんな情報が流れて、音楽に対する相当なうんちくというか、含蓄というか……

大嶋 あれは趣味の領域で……

森村 それがさっきいった話で、ちよつと前ですけれども、彩流社という出版社がありますね。この間の南塚信吾先生の御退職記念の本

を出したときに、たまたま研究科長だったから、向こうの社長と編集長に会って、その後いろんな企画の話をした。そのとき編集者の一人とたまたま懇意になって話した中で、「大嶋先生はお元気ですか、相変わらずベースをやっていますよね、玄人はだしですよ」という話をしていて、格が全然違います」と。先生は趣味というふうに謙遜されるんだけど、前からライブハウスでやっていたりとか、仲間といういろいろセッションをやったりとかという話を伝え聞いているし、あれなんです、そういう科目はもたれないんですか。

大嶋 そのものはできないので。ただ、昨年度、研究留学をさせていただいて、三たび自分の大学院時代の母校を訪問したわけなんです、そこではアートとテクノロジーとマネジメントとソーシャルコミットメントみたいなものが全部大きなアンブレラのプログラムの下に集まって、非常に大きな学内的なムーブメントというか、うねりを起こしつつあるんですね。

自分の興味は音楽とコンピュータサイエンスなりなんですけれども、芸術学部 of 学生さんが物づくり的な環境でプログラムを書いたりとか、メディアアートを直接自分でプロデュースして、細かいところまでつくっていくようなことをやっているんですよ。片やエンジニアリングの学生さんなんかは、そういうところに入るとピアノとかをやらされたり、建築科でデザインの基礎をたたき込

まれるとか、製図をやらされたりとか、そんなことが起こっているんですね。

自分が担当できる幾つかの科目の中で、その手のコースとかには余り関係なく、いろいろな学生さんの関心領域を横につなげるような提案ができないかなと思っていました。ただし、それはいわゆる上のほうの科目になってしまおうと思いますので、やはり入門科目だとか、リテラシーだとか、情報のファウンデーションをやる科目の中で、お互いに横がみえるような連携をして、できるだけ学生さんの視野を広げて豊かにしておくことをこれからやりたいなど。

つまり、アンテナが立っていないと、幾らいいものをみてもぴんとこないとか、自分で自分の領域を非常に早い時期に狭いところに閉じ込めてしまうと、その後、先細りというとおかしい、そのまま真つすぐ伸びていければいいけれども、実は横にももつとおもしろいものがたくさんあって、自分はそっちのほうにも適性なり感度があったと思います。それは、我々のようなデジタルメディアとか、インターネットにずっぽりはまっている人間に声をかけて、使ってもらえればという感じはしています。

森村

今わざわざ無茶ぶりのなこともお話ししていただいたのも、私なりの懐古趣味的なところもあって、うちのゼミ生の忘年会で一期生から集まると、一期生ばかりいうないつもお叱りを受けて、今の子たちをちゃんとみてくださーいといわれるんです。比較して一期生と十五期生は違うんだよねというのはやめたほうがいいよと古参の学部生、卒業生ですけど、もう三十過ぎのおっさんたちからいわれながら比較してしまう。初期の学部生にはもつと遊びにたけていた子が多かったんじゃないかと。さつき知的好奇心という言葉を使いましたが、結構好奇心をもっていた子たちが来た。

なぜさつき School of Visual Arts の話をしたかというと、絵を描くとか、もしくは音楽も含めて趣味、もちろんそれは何の趣味でも構わないんだけど、それをもう少し前に出していこうという子たちがもうちょつといたんじゃないかという気がしています。いろいろな境界領域というか柱を立てていくというのは本当にいいことなのか、学生たちの中にも、これは授業で単位をとること、これは学会で発表すること、これは自分の趣味で聞いている音楽とか、これは部活動とかサークル活動でやること、これはバイトでやることみたいなのがすぐカテゴライズされ過ぎちゃっているというか、テーマ化され過ぎちゃっている。

無茶な話をすれば、趣味をどうやって飯が食えるネタに変えるかとか、世間様に通用するために自分が今何が必要なのかとか、これをつなげていく。小部屋にいっぱい分けるんだけど、これをやっていることはこつちと余り関係ないんだしとか、ゼミは自分の好

きなことをやるよりも、就職が一番いいところに入りましたみたいな子が出そうな雰囲気、もしくはもう出ているのかもしれない。

昔は、このままで飯が食えたらいいけど、そうもいかないだろう、就活を始めたらもっと違う自分に気づいた。でも、「せっかくゼミでやっていることも何かに使えたらいいよね」と気づく学生もいる。引き出しがあっても、引き出しのものをこっちに移してもいいじゃんみたいな子たちが、衣類をこちらの引き出しに入れ直して、別の箱の中に入れておいてもいいんじゃないのという子がいたような気がしていた。しかし今はここにラベルを張ったら、ここからなかなか出さなくて、この引き出しの出し入れだけで済むみたいな、別のときはこっちの引き出しをみていればいいかなという感じにみえちゃっている部分がある。

大嶋先生って、実は情報オタクなんだけれども、音楽、ロックオタクでもあってとか、ご自身はちゃんと楽器も弾いて、ギターをいっぱい集めているんだよねみたいな、そういう多面性とか多角性みたいなものを学生たちがどういうきっかけでもう少しポジティブに語れるようになったり、そういう先生をつかまえて、その議論で卒論とか制作できないのかなみたいな、そういう気もあったので、ちよつと無茶ぶりをさせていただいたんですけれども、先生なんかはどのように考えますか。

大嶋

ここ二年ぐらいは、ですから、ゼミもアートな物づくりにテーマを広く変えまして、勉強してもらうことはしてもらいながらも、かなり自由にいろんなもの、作品づくりとかそういうところにも能力を発揮してもらえよう工夫は続いています。

これ（学部一期生が制作した卒業アルバム）を覚えていらっしゃいますか。これは一期生の有志がつくったもので、すごくクリエイティブで格好いいんですよ。

森村

そういえばありましたね。懐かしいですね。

○大嶋

先生の若い写真も載っていますけど。

○森村

そうでしたっけ。

○大嶋

川村さんも若いです。

○森村

それこそ十数年前ですもんね。若いですね。そうでしたね。だから、こういうことが常に彼らの発案の中で出てきたじゃないですか。つまり、自分たちが企画して物に変えていくとか、その作業もボランティアというか好きでやっているから徹夜してもオーケーだよ、ねというのが結構あったので、いつときみたいに、アルバムをつくらないという学年が出ちゃったりしたことも最近あって……

大嶋

あるいは、みんなの写真を撮って、それをプロダクションに出しておしまいというところですよ。

これ、ミックスメディアで、しかもこんなところに絵が入っているというので、これ、物すごくクリエイティブなもので、これは別に学会活動でもなければゼミでもなくて、やりたいといっている人たちが集まって、誰からも教わらずに、Macを使ってシコシコ作り上げたものなんですよ。

だから、今の学生さんも、彼らなりに僕たちのみえないところでつながって、ちゃんと充実したところを追求しているんだろうなとは想像はしますけれども、我々が働きかけようと思っているところとかみ合ってきていないのはこちらの責任かもしれないし、残念ではありますね。もう一度そこに働きかけていきたいとは強く思います。

いわゆるプロモーションとか、外からのジャンル分けみたいなものに押し込められちゃって、広い領域、広いところから学生さんに応募してもらえる入り口になっていないんじゃないのかなというのが……。

森村

そこがまさに残念なところで、もちろん相互あつてのものだろうから、こちら側だけ力いっぱいやっても、向こう側が的外れなことがいっぱいになっていてはまずい。向こうが期待したことをこちら側が十分酌み切れていないので提供できていないのか、そもそも向こうがこちら側に何も期待していないから、こちら側も手を伸ばし切れていないのかがちよつとわからない。暗中模索ではあつても、何かまだ——というか、まだどこか全然していないので、まだどこではないんですけれども、情報文化コース、もしくはこのまま大学院の研究科の中における、要するに多文化情報の情報ベースの科目であつたり、内容であつたりということが、いま一つ外に対してアピールし切れていない。

もちろん二〇〇六年以降、大嶋先生や私たちも後発ではありますけれども、大学院に一応入り込んできた。甲先生のところから何人か出て修士はとつていったけれども、私のところもそれまではゼロだった。情報学グループとしては、大学院も学生に対してのアピールがいま一つ足りていないか、もしくは学生がそれを目指してなかなか来ない。最近では、大嶋先生を狙って中国の方がいろんなネットワークを使っていってしゃって、先日の入試のときにも何人か大嶋先生指名で来ていましたよね。大学院について一言、二言いただけたらと思うんですが。

大嶋

大学院の三つの研究領域というのがありますね。異文化相関関係研究と多文化共生研究、三つ目が情報系を含めたときに無理やり

つけた多文化情報空間研究、これがわかりにくいということを一部の先生から繰り返し批判を受けるのですが、僕はここに（「異文化の別冊」）多文化情報空間とは何だとすぐクリアに書いておりまして、これを批判してくれと。これが共有されない、僕だけのひとりよがりな考えかもしれないし、とてもじゃないが、大学院の研究領域をいいあらわす言葉としては適切でないではないかというご批判ならわかるんだけど、それって一体何という質問は今さらないだろうというのが僕の戸惑いと申しますか。

要は、これも今日のな社会状況を情報学という親学問に即してみるならばこうだよねと。ネットとリアルなんていわないでほしい、それはもう一緒になっているんだから、それを含めてリアルといっているじゃないしょうということもあるだろうし、やりとりするチャネルの数という形で、いわゆる旧来のマスメディアと自分というようなメディア論的な枠組みじゃなくて、ネット社会と自分を流動的で多層的でというのを情報空間と呼ぶだろうということなんです。だから、情報空間研究でよかったんだけど、よそが多文化とか異文化とかいつているので、これもそろえるという意味で……

森村 いつとき、あの名前をつけるときにもめましたよね。

大嶋 どっちかにするならば、多文化情報ですので、多文化情報空間といって、ただ情報空間と乱暴にいうだけでなく、多文化といつてあげて、Graduate School of Intercultural Communication)の中のキーワードとしてはそんなには悪くないかなと思ったんですね。なので、プロモーション不足なのか、ちゃんとそういう論文を書けというご批判も含めて、まだ自分はそこまで行っていないという感じはするんですよ。だから、目指しているものは、実は学部の説明のときに使ったキーワードとかコンセプトとちつとも変わっていないくて、これを僕は入門科目では一年生に読ませている。変だと思ったら突っ込んでいいことを申しているんです。

森村 そのところは、どうしても先ほどの一番最初の話に戻っちゃうようなところがあって、この学部は何をする学部だっけという議論と、この大学院で、それをどう上に乗せていくかという話は全部連続しているわけですよ。その中で文化情報学というものが基本的に理解されていないというか、そもそもそんなものがないから理解できないんだという話はちよつと置いておいても、そのためにつくった学部なんだよね、看板はそれで申請しているんだし、文科省はそれで認可をおろしたわけだから、これ、やらないと詐欺になるよねというところをもう少しリアルに考えていかないと、極端な話をする、実際問題としては、うそ学部になってしまうから。

大嶋 そうなんですね。新しい言い回しを使って立ち上げたことに対する内側からの責任を毎年やっていることの中でどのように受けと

めて練り上げていったかというのは、何か形を残さないといけないとは思いますが。

今まで国際文化の本が二巻出ました。また、「国際文化研究への道」が論文集という形で出ていまして、ありがたいことに、おまえも書けとは言ってもらったんですけれども、今申し上げたようなことが自分の中では全然消化できていないので、書かなかったというのか、書きたくなかったというのか、書けなかったということはあるんですね。

あと、自分なりの違和感や抵抗感というのもあります。つまり、人物列伝の中に、例えば情報の専門家みたいな人で国際的な活躍をした人を入れたら、それで何か仕事を紹介したことになるのかということがあったりするんですね。あれはいい本だと思うんだけど、とてもじゃないが、ああいうまとめ方では、自分が考えたいと思っている道筋から乱暴に断ち切られた感じがして、ちよつとつらかったんです。

森村

あの二巻本は、もちろん国際文化学部の一つの成果として重要なことだったので、そのことは私も執筆者の一人としてよかったなと思っている、このことはきちんと評価する。だけれどもそれで終わりじゃない。もしくは次といつてもいいのかもしれないけれども、学問業績というか、学部のきちんとした成果物はまた別にあってもいいだろう。思想だったので、私もあれに執筆をしました。自分は思想をやっている専門家なので、私を外して思想は絶対いわせたくないと思っているプライドもあった。ある意味で思想という考え方、哲学ということが、私はこれで飯を食ってきた部分があるので、思想にかかわる仕事として、どんなものでも私をまず置いてはないだろうというぐらいの自負があった。なので、思想家列伝に名前を書くのは別にいいと思った。

だけど、それと同時に、国際文化学部なり、露と消えてしまった国際文化情報学部のスタッフとなるために、第一教養部ではなくて、ここに創設をしたところのメンバーに入ってきたわけで、その中で、川村さんが柄谷行人先生の兄弟子で文化情報学をつくるんだからといったときに、私は思想という親をもつていながら、文化情報学というのは一つのチャレンジではあったけれども、どういう形で自分が生かせるのかということを考えた。そのときに、文化情報って何ということを含めて、川村さんの『異文化』第一号の記事も含めてこういうものなんだと。文化情報の編さん、蓄積、再編集、そしてその情報発信なんだということ。それを、まさに大嶋先生がいわれたようにカルチュラル・アーティファクトをどういう形で発信していくのか、「トランスカルチュラル」のレベルでという話を考えていく中で、思想という親学問を情報という「インフォマティクス」の中にかみ合わせたときに、ただの情報哲学とか情報

倫理学という学問分野ではない何かが見えるのかと思った。だから、「文化情報の哲学」という自分なりの科目名称をあえてつくって、その中であらゆる哲学や歴史的な哲学者の相手をしながら、今の自分がそのテキストをどう読んで、再編集しながら自分の中で外に向けて、学生に向けて出していく。もちろん、そのテーマは哲学オリジナルの哲学的な話ばかりかもしれない。

今年度の春学期があつて、「民藝」の柳宗悦を扱ったら、受講生が五人でした。ゼミ生と、他学部が一番優秀な学生。私は二十人、三十人来るかなと思って、「民藝」、日本のデザイン、それをもう一回大正から昭和初期にかけてやるつもりだった。柳の中には朝鮮の問題が入ってくるし、アジアや沖縄の問題が入ってくるし、ヨーロッパの宗教が入ってきたりする。柳はビズリーなんか好きだから、象徴派の芸術のビズリーなんかの版画を「民藝」という雑誌の表紙に使ったり、そういう意味でいうとインターカルチュラルだし、もしくは今、興味のある日中、日韓、日米の問題もそこにもある。もしくはイギリスのバーナード・リーチとつき合っていたというものを含め、そしてその中で民衆の知恵としての陶器だとか磁器であるとかといったものを扱う。それらは文化であり、まさにアーティファクトであり、そうした意味での表象的な部分もあるし、もしくは思想的なものもある、宗教的なものもある。そしてキー・パーソンである柳はもうちょっと知られてもいいし、これを哲学の領域でどうやって扱おうかと、自分としては柳の全集を相当読んでいて準備したのだけれども、来たのは五人で——別にいいですよ。その中で来た子たちがおもしろがってくれたというだけで、一つの成果を出したと思っています。

ことはまた別のテーマに切りかえちゃうんですけれども、まだちょっと準備不足だな、自分にとつてまだこなれが終わっていないなどと思ったので、出したのが早かったのかなと思ったりしながら、ちょっと反省はあったんですが、そういうものも情報学の中に入れてもいいんだと私なんかは思っていてやっているわけです。

大嶋先生が今後、文化情報学、もしくは今いった大学院の情報空間という科目をおもちになったり、先生は、科目名称としてはメディアという分野で、この間の院の試験が終わって、先生が何人か面倒をまみましょうといったってくれた方たちが四月からいらっしゃるし、もしくはM1でも授業をとる子たちも多分出るだろうとは思っています……

大嶋 そうだいいんですが。

森村 でも、そうしないともまずいというか、その中で先生が大学院教育と学部教育とどういう……連続性なのか、それとも分け方という

大嶋

のは何かあったりしますか。

つながりがないというたまずいですよね。つながりはあるんですが、真つすぐ積み上がっていないですよね。内部進学の人がたくさんいて、私はエンジニアリングの人間だから、学士をとったら修士へ行つて、修士へ行ったら博士へ行つてと上に上がるような形のパスを考えてしまいがちなのです。しかし、うちの学部の場合は、いろんな進学なり進路が考えられて、ありていにいつてしまうと、法政だとかよくできる子は非常によくできるので、早稲田へ行ったり東大へ行っちゃったりすることもあるわけなので、そこも含めて物をみていかないといけないと思いますね。

別に真つすぐ上に上がる人が二番手、三番手だという言い方ではなくて、進学するにしてもいろいろな自己実現のパスがあるということなんです。その中では、親一人子一人じゃないですけども、この先生についてさらに勉強したいという形のものもあるならば、領域としてもっと分厚いところに行つて自分を鍛えてもらいたいという志向も可能なわけですので、それを全て引き受ける受け皿としての大学院はまだまだ不十分だと思います。

極端な話、うちの学部の先生方が皆さん大学院科目を担当してくださるんだったら、ゼミにいるよくできる子とか、もつと勉強したい、このまま就職するのは嫌、あるいは他大の大学院でびつたりくるところがないという人がいたら、俺のところへ来いといつてあげればいいわけなんです。でも、それはないですよね。だから、ゼミに入つて、それなりの成果を出しても、上が続いていないというケースも考えられる。なので、大学院だけをどのようにやっていけばよりよくなるかという議論はなかなか難しいと思います。

もう一つは、いいにくいことですけれども、内部進学される人と、ほかの入試経路で入ってくる人というのは、基礎学力や前提知識が違います。それは能力の差ではなくて、条件づけの差なんです。それをある程度は広く束ねて支えてあげないといけないということなので、大学院のファウンデーションの科目というのは物すごく難しいということがあります。

足りないものは、学部教育だとレメディアルとかという考えがあつて、どうしても必要なものとか、レベルが追いついていないものは、別のところで頑張つて勉強させて追いついてもらうというのがあるわけですけども、大学院にはそれがいいですよね。なので、そこはどうしようもないというか、今のままでは解決できないと思います。

森村

大学院を学部との連続体として考えるにはなかなか難しいところがある。まして、前回の座談会でもちよつと出て、私から提題した

のは、外国人、特に中国人留学生の方が今回のように大量に来る可能性が今後まだしばらくあるだろうというときに、単純に言えば、彼らは主に学位をとりたくて来る部分が多い。つまり、日本に来て、結局中国本国のことをやろうとしているわけですね。

大嶋 そこが得意分野ということになるわけですね。

森村 あとは日中比較。

大嶋 それも発想しやすいテーマではあります。

森村 だから、その中で、まずその問題をどうするかというか、来た子たちだから、それなりにこちら側も手当てをしていくというところがあるんだけど、もう一つ、大学院教育としてきちんとした軸を立てていくというか、教育として、国際文化研究科として、国際文化専攻として修士（国際文化）を出すときに、学部とは違うので、大学院としての何かが必要なのかどうかということ。例えば、三分野とうたいながら、正直いうと、そういう子たちは三分野網羅しないですね。

大嶋 これがまた、ニンジンでもピーマンでも食べなさいという話になるわけです。でも、そうすると、こだわるようですが、それぞれの分野で研究対象と親学問、それから成果として目指すものの三つはもうちよつとはつきりいつてあげないとだめなのではないかなというのがありますね。

それから、コースとはつながっていないけれども、コースはある学問分野なり、そういうものを緩く束ねるコンセプトとしてはあるわけなので、コースの専門科目であるとか、演習の科目みたいなものには、場合によってはちよつと逆戻りして、学部科目を大学院でもとってもらいたいというようなものはあるわけで、現実の運用としては、自分の学部ゼミに院生の君も来なさいみたいなことをやられている先生はいらっしゃるのではないかと思うんですね。でも、それは制度上はない話です。

そうすると、いわゆる一貫教育的なもの、真つすぐ上に上がって条件が整えば、一年アクセラレートするよという感じの五年間でマスターをとるまでみたいなの周りに、そういう学部科目の中かなりハイレベルなもので、大学院のよそから来た人がもっていないものをつけてあげるようなものを用意できれば、もう少し状況が改善するかなという気はするんですね。

僕が入門科目を担当しているときは、実は大学院で留学生の人とか自分の知っている大学院の学生さんにティーチングアシスタントをやってもらっているんですよ。そうすると、耳学問というのか、リアクションペーパーを整理させたりとか、いろんなプリント

を配ったりするような作業を手伝ってもらう中で、学部生はこんなことを教わってきているんだというのが少しはわかるんですね。多少のプラスにはなるかなという気はしますので。

大学院の人にできるだけロールモデルとしても、学部生に自分たちが頑張っている、活躍している姿を身近にみてもらいたいという意味もあって、ティーチングアシスタントをたくさん雇って交流させてほしいというのも提案した、少なくともその一人は僕なんです。それはもっと伸ばしていけばいいかなと思います。正規科目としては成立しないところかもしれないけれども、アルバイトにもなるし、ロールモデルにもなる。また、研究するだけで修論、D論が書けるようにはならないという指導能力ですね。ある研究分野なり、ある学術分野で後進を指導する能力を身につけてもらうという意味でも、アシスタントなり、形はわかりませんが、制度がいろいろありますけれども、RA、TAみたいなところですね。それをもっとたくさんやってもらったほうがいいと思います。

森村

期せずして大学院の教育のほうまでご提案いただいて、すぐためになったんですけれども、この間の座談会のときも、どうやってら学部生と院生の交流、もしくは教育にかかわるような形での、もしくは同じ釜の飯を食うみたいな話も含めてですが、各個別のゼミの中でやっている先生とか、それは個別対応なので、制度としての下支えがあつたりとか、教育としての積み上げがあるわけではない。院生がいなくなっちゃえば単発で終わっちゃうから、それをもう少し学生内とか、院生内とか、院生・学生内でも、相互でもクロスでもいいから、ある形で結びつきを少しもたせる。それをきちんとした制度なり単位なりで認めていくような形でのものがあれば、その辺が結びつきとしてもう少し強固になって、学部生にも大学院の情報が入ってきたり、院生にも学部生と自分とのある種の受けたものの違いがいろいろあることがわかる。そのことによつては、もう一回学部の中の授業に潜り込ませてもらいたいとかということをもう少しオープンにできれば……。

というのは、学会をやってみて、学部生の発表と院生の発表でフロアの人数がどんどん変わったりするじゃないですか。ゼミの子たちはいるけれども、全然違う子が、院生の発表に切りかわった途端に別の仲間のゼミ発表を聞きに行っちゃって、そこが審査の学生と先生しかいなくなっちゃう。

もう少し研究テーマみたいなものが近ければ、院生の発表をもうちょっと聞いてみたいとか、違うゼミだけど、似たようなフィールドでやっているんだったらちよつと勉強になるかなとか、そうした交流もお互い同士がシャイなままというか、ちよつと遠慮して

いるのか、興味が無いのかわからないが、その距離感みたいなものをもう少し縮めるようなアプローチがあってもいいのかなと思っています。今の先生のお話も含めて、五年間で学部と院とくつつちゃってマスターぐらいを出せるような制度化とか、相互乗り入れ的な科目というものがどこまで可能なのか。学則に抵触しないレベルで、もしくは新しく研究科としてとか学部として認められるレベルで可能になる道はまだまだ模索可能性があるのかというのは議論の余地がある。

最後のまとめとして、これからの情報文化コース、もしくは今の研究科の情報分野も含めてなんですけれども、直近の目的、目標的には何か腹づもりのなものは、先生、今あります。学部内の何かで、情報をもう少し前面に出していくような計画であるとか理想、もしくはこれから来る学生や今度大学一年生で入ってくる子たちに対して、情報文化コースの中とか、文化情報学の基礎でもいいから、先生方で思っていることがあったら何か。

大嶋

先ほど少し申し上げたことの繰り返しに近くなっていますけれども、今、我々は、おかげさまで情報に関連する科目を一年生、二年生を中心に複数コマで展開しているという点はもつと有効に横につなげて、さらに上につなげてということをやりたいと思っています。

非常に残念なことに、コマ数をみれば学年全体に対して開講しているということはメッセージとして明らかにはずなのに、自由選択であった時代には、履修者が非常に落ち込んだのが問題になった。それはなぜかというと、あれは情報コースの学生がとる科目だと思っていたか、思いたがっていた。つまり、苦手感というものをそういう形で表明して、それがまた履修行動にあらわれていったということがあった。

そうすると、上にあるものが幾らおもしろそうであっても、つながってはいけませんよね。なので、それは喫緊の改良改善の課題として、我々、いわゆる情報教室で科目を担当している教員は痛切に何とかしなきゃと思っているので、そこを直したいなと思っています。

森村

そこはどこから始まったと今さら詮索しても仕方がないでしょうけれども、原因的なもの何かあるんでしょうか。

大嶋

始めたところは、本当に文理融合をうたっていたし、入ってくる学生さんも、高校のときは理系クラスだったんだけど、いろいろおもしろそうだからこつちに来てみたという選択をした人もある程度はいたんですよ。だけれども、逆にいうと、今はさっきのス

マホ世代の情報離れというのか、大学に入ってくるまでの環境なり状況なりが我々からみると割と歯がゆいというか、望ましくないところに落ち込んでしまっているの、それを大学に入ってきてから何とかしようというのは非常に難しいものがありますね。だから、それこそ接続教育とか高大連携みたいなところも含めてもう少し働きかけをしたいと個人的には思います。これは必ずしも共有されている考え方ではないので、あくまでも僕自身の考えというふうに限らせてもらいます。

というのは、教職科目も運営している関係上、教職をとってもらって、高等学校の情報科の先生に戻ってほしいんです。これがもう少しうまくいくと、サイクルが生きてくるというか、そういう人に教わった人が法政の国際文化に行ってみようかなという道もできますので、長い目でみれば、高校から耕していくというのがどうしても必要になります。

森村 二、三年前、森村ゼミの十二期生に○○君という男の子がいました……

大嶋 ええ、存じています。僕の科目をたくさん履修してくれました。

森村 彼は、高校が情報コースだったんです。工業高校の情報をやってきて、それで彼の人生設計は情報で生きていこうと思って、たまにそれが推薦枠が何かで、自分は受験レベルとしては低いから、そういう分野で推薦してもらったので受かった。最初、彼はずっと高校の情報学の教師になるつもりでやっていて、ちょっと抜けたところがあって、一科目落としたのでアウトになっちゃって、結局、情報教員免許をとれなかったんです。

彼は、自分が情報学によって自分の生きる道というか、コンピュータを使っているいろんなことがクリアートできる、もしくは編集できるといことが、彼にとっては相当楽しいことだった。自分にとって生きがいみたいなものを得た。だから自分は情報の教員になって、これを高校生や中学生に教えたい。そういう目的から教職をとるんだといっていた。彼は夢が半分敗れちゃったんだけど、結果的には今、製薬会社で働いています。

彼自身が卒論のテーマで情報教育、その中でも高校の情報教員は嫌いだった。その中でさっき先生がぼろっといったように、数学の先生とか物理の先生がおまけで情報を教えていたというのが彼にはどうも気に入らない。もっとプロの情報の先生がプロの情報の教育をしてほしかったのに、何を聞いても片手間な話しか返ってこないみたいな話があって、だからだめなんだ、もっと情報をちゃんと勉強して、情報のおもしろさをわかった人が若い自分たちにちゃんと情報の広がりや深さを教えてくれるはずじゃないとだめな

んだという話をしていた。だから、どうしてもその辺を、もう一回ちゃんとした情報を学んで、情報のおもしろさとか、すごさとか、危なさとかを知った自分が実際の若い中高生に向かって何か説明できる。だから、来るべき情報教育みたいな卒論を書くんだと。それがまさにうまくいくてくれることを願ったんだけど、本人の気の弱さで挫折しちゃったんです。

○君は、それまで自分は高校の情報コースだから、一般の普通科とは違うんだよねというコンプレックスを思ってきていた。でも、ここに来て、文系だけれども、情報科学部並みに学べて、それなりにたくさん科目をとって、大嶋先生が授業をやっているところをのぞいて、コンピュータをいじらせてもらっていた。私がいろんなものを編集させると、嬉々としてやるわけです。だから、学会発表もいろんなメディアを使って、彼のおかげで森村ゼミはパフォーマンス部門では優秀賞をとりましたけれども。彼はそれを目指して、それをやるためにここに来たみたいなのがあるところがあって、それがさっき先生がいわれたように、戻って高校の授業なりに、また若い人たちにきちんとしたサイクルをつくるというのが一つの目標、目的であっていいかなと思う。たまたま私のところにいた彼みたいな人が一人でも二人でもここに来て、またそこで情報教育を受けながら、自分は高校の先生になるんだとか、研究者としてそういう企業の研究者になっていくんだとか、そういうのもいろんな形で可能性としてあるのになというのがあって話をしてしまいました。手前みその話をすれば、私の一期生から四、五期生まで、なぜかS Eが結構いたりして、あの時代はそういう感じがありましたよね。

大嶋

今も結果的にはそういう職種に就職する人は多いはずです。

森村

ですよ。たくさんいる文系のわりには。

大嶋

ただ、そういうのが大事だねということに気がつくのが、S Aから帰ってきて、三年生になってからだ。それはちょっと遅すぎるんじゃないのという気はするんですけども。

森村

そういう中で、国際文化の今は情報文化コース、かつての文化情報だったり、その前はそもそもコースなんてなかった。一学科しかなかった。その意味では、情報文化コースには限らないけれども、ほかのコースの子たちがS Eになる道や、いろんな形で情報学を学んでいる子たちもいるわけですから、そういう形では国際文化学部の中の情報学という位置もまだまだ展開可能だし、後をどんどんつないでいくことの可能性はまだまだありそうだなという気がいたします。

長くなってしまいましたけれども、先生、何かメッセージ的なものでもあれば。大丈夫でしょうか。

大嶋
森村

言いたいことはいろいろありますけれども、もうこの辺で。
では、本当に長い間おつき合いいただきまして、どうもありがとうございました。では、これにて終わります。

(二〇一七年一月三十日・国際文化学部長室にて)